

広くてスマートな岩手

私は釜石市出身であるが、40年近く岩手県を離れている。東京で就職した頃、同郷の知人から聞いたジョークがある。三陸町吉浜出身のA君が東京で会食に招かれ、豪華なステーキが出てきた。遠慮して食べずにいると、招待者が心配して「お嫌いですか?」。A君は「いいえ、吉浜です!」。吉浜の南に越喜来(おきらい)という町がある。A君は、越喜来出身かと問われたと勘違いしたというオチだ。

吉浜は美しい砂浜海岸である(下図参照)。中学時代、友達とよく泳ぎに行った。当時吉浜は三陸町だったが、今は大船度市。改めて地図を見ると、盛岡市と宮古市が接するほど市町村合併が進んでいる。岩手県の市町村数は、2001年の59から現在33に減少した。この市町村数は、東北地方では秋田県(25)に次いで少ない。1市町村の平均面積は、秋田465km²、岩手462km²。東北の他県は全て200km²台なので、この指標は岩手、秋田両県の市町村合併の進展度を示すとみてよい。

市町村合併の主眼は、規模の経済で行政を効率化することにあるが、合併により管理空間は大きくなる。一方で、近年の地方都市整備計画では、コンパクトシティが指

向されてきた。都市の重要機能を中心部に集約し、行政効率の改善や住民の利便性向上を狙うもので、小さな都市空間を理想とする。将来に向けては、スマート(スーパ)シティが提唱されている。地域内でのビッグデータ取得とデジタル技術の活用で、住民生活の質的向上を目指すものだ。奇しくもコロナ禍での「リモート○○」の普及で、デジタル化は空間制約を緩和することが判明している。

そうなると、市町村合併、コンパクト/スマートシティは総合的な政策なのかという疑問も湧く。これらの政策は、全体最適の視点から推進されるべきだと考える。例えば、市町村合併と地方都市のコンパクト化を脈絡なく進めると、都市と周辺地域との間が間延びする。人口減少下で公共交通機関が縮小されているため、地方のマイカー依存度は一段と高まる一方で、高齢化の進展は将来のマイカー依存を困難化する。このジレンマは、デジタル技術の活用で解決できると思う。まず、テレワークやeコマース、オンライン診療、デジタル・ガバメントの普及は、都市への移動機会を減らす。また、住民の移動データを取得・分析することによって、オンデマンドの自動運転バ

スやライドシェアを含め、需要に見合う最適な移動手段の提供が可能となる。

このような「広くてスマートな岩手」が実現可能であっても、多くの住民がこれら機能を使いこなし、満足しなければ意味がない。従って、年配者を含めた住民への地道なデジタル教育と、家族や地域コミュニティの支えが不可欠である。私を含め、年配者の行動変容には動機付けが重要だ。私に孫ができたら故郷・岩手の美しさを見せてあげたい。そのためなら、インスタや動画嫌いの私も、スマホをフル活用するようになるだろう。



NTTデータ経営研究所
取締役会長
岩手銀行 社外取締役

宮野谷 篤



「慈光～三陸へ」(2012年筆者画)
震災後に訪れた吉浜の日の出